実践報告　言語活動を取り入れた授業づくり

文章の内容を叙述に即して読み取り、それを伝え合う場を通して深めよう
（現代文）

実践報告者　長崎県立長崎北高等学校　教諭　酒井聡子

１　科目名・単元名
・科目名　現代文（２年生）
・単元名　文章の内容を叙述に即して読み取り、それを伝え合う場を通して深めよう。

２　単元の目標
・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりしようとする。（関心・意欲・態度）
・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりする。（読む能力）（Ｃ　読むこと（１）のイ）
・語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、自分の表現や推敲に役立てる。（知識・理解）（指導事項（１）のア）

３　取り上げる言語活動と教材
・言語活動　論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書く。（言語活動（２）のイ）
・教　　材　「逆説思考」森下伸也

４　単元について
本実践に取り組んだクラスは、現代文の授業において読むことをいとわず、前向きに取り組む生徒が多い。しかし、これまでは授業者の発問に生徒が答えていくという形式で授業を進めることが多く、生徒が教材を主体的にまた積極的に読み込んでいるのか、また教材に取り上げられた問題を自らに引き寄せて考えられているか、という疑問を授業者は抱いていた。そこで、生徒の理解力・思考力・判断力をより高めるための方策として、「書くこと」を積極的に授業に取り込むこととし、教材や言語活動の中身（構成図・見出しの作成、要約文を書くなど）に応じて、個人・ペア・グループ学習と形式も様々に取り入れながら行ってきた。現在では、自分の考えを述べたり自分の成果物（書いたもの）を発表したりといった活動も徐々に活発に行えるようになってきている。

本単元では、文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、要約や詳述する力を付けさせたい。また、個人で解答を作成し、その解答の作成過程やポイントを他者に伝えたり他者の考えにも触れたりすることで、自身の考えを深化させたい。そして、本単元の筆者の考えを自らに引き寄せ周囲を眺めることで、自身の考えをまとめさせたいと考える。

５　単元の具体的な評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりしようとする。	文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりする。	語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てている。

６　単元の指導と評価計画

時	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点	具体的な評価規準と評価方法
1	○全文通読 ○第１段落の読解	・語句の意味の確認させる。 ・全体を４つの意味段落に分け、内容を確認させる。(段落の見出し程度) ・「ところが」のあとに、逆説思考の説明が述べられていることを確認させる。 ・「功徳」の意味に留意させながら、「二つの功徳」の内容についてまとめさせる。	【評価規準】 ・語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにして、自分の表現や推敲に役立てている。 （知識・理解） 【評価方法】 「記述の点検」
2	○第２・第３段落の読解	・「喧嘩するのは善人の証拠」という逆説的思考について理解させる。 ・『吾輩は猫である』の「吾輩」の主張を通して、漱石の逆説的思考について理解させる。 ・最後の形式段落が「人間が自分でつくり出しておきながら、人間自身を苦しめているもの＝西洋文明」という主題への足がかりとなっていることに気付かせる。	【評価規準】 ・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりしている。 （読む能力） 【評価方法】 「記述の分析」
3	○第４段落の読解 ○意見文を書く	・漱石が生きた明治時代、国家が文明開化、西洋文明の輸入という重要な局面にあったことを押さえさせる。 ・「開化の生んだ一大パラドックス」の内容を押さえさせる。 ・「かえって」「～なのに」「～ものの」のあとに、読み手の想像とは異なる内容が述べられていることに留意させる。 ・「文明開化のパラドックス」とはどのようなものかを、簡潔にまとめさせる。 ・自分の考えを他者に伝え、また他者の考えに触れることで、考えを深めさせる。 ・漱石の「予言的パラドックス」が的中している身近な例を挙げながら、意見文を書かせる（家庭学習）。	【評価規準】 ・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりしようとしている。 （関心・意欲・態度） 【評価方法】 「行動の確認」

７　本時（第３時）の指導

（１）本時の目標

・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりしようとしている。（関心・意欲・態度）

（２）本時の授業展開

時　間	学　習　活　動	言語活動に関する指導上の留意点
導入 5分	・前時の学習内容を想起する。	・第３段落までの内容を確認する。
展開 15分	・第４段落を読む。	・漱石が生きた明治時代、国家が文明開化、西洋文明の輸入という重要な局面にあったことを押さえさせる。 ・文明の原動力は「活力節約」「積極的活力」の２点であると述べていることを確認させる。 ・「開化の生んだ一大パラドックス」の内容とその理由を押さえさせる。 ・「かえって」「～なのに」「～ものの」のあとに、読み手の想像とは異なる内容が述べられていることに留意させる。
10分	・ペアを組んで、「『文明開化のパラドックス』とあるが、それはどのようなものか」という問いに対する答えを交換し、各自が補足、修正をする。	・ペアをつくり、それぞれの予習してきた答え（考え）を伝え合わせる。 〇解答を作成するに至るまでの思考過程 〇解答のポイント ・交換後は、相違点を確認し、違いの理由を考え、妥当性を判断させる。 ・再度自らの解答を補足、修正し、深化させる。
15分	・修正後の解答を発表する（２人）。	・修正前の解答を黒板に拡大して張り出し、修正後の解答を発表させる。その際何をポイントにして修正したかも発表させる。
	・解答のポイントを確認する。	・努力してきたのに、苦痛が激しくなるという逆説的事態を解答の中心に据えることを確認させる。 ・「活力節約」「積極的活力」に触れること、「文明開化の状況下」を押さえることを確認させる。
まとめ 5分	・家庭学習の内容を知る（意見文を書く）。	・本文最後の一文「漱石よりもはるかに～実感ではあるまいか」という筆者の主張を確認し、自分に引き寄せて考え、具体的な例を考えて意見文を書かせる。

※生徒が書いた意見文は相互に交換し、コメントを書かせる。その後指導者が評価を行う。

（３）本時の評価
文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりしようとすることができたか。

（４）言語活動と「読むこと」の力の向上を結び付ける工夫について
授業の前半で本文の読解を行い、本文の内容を理解したところで、予習してきた解答を開き合い（表明）、相違点を確認し（照合）、違いの理由を考え（分析）、妥当性を論理的に判断し（評価）、自らの解答を補足修正し改善を図ること（再構成）を行いたい。ペアで考えを伝え合う際にはただ解答を読むだけに終始しないよう、ポイントを示すこととする。修正前の解答を黒板に示し、修正後の解答および修正のポイントを発表させることで、考えの共有を図りたい。

（５）「言語活動」を取り入れた授業の成果と課題
授業後半の「言語活動」になるべく多くの時間を割きたいと思っていたが、実際は生徒自身による解答の補足修正にあまり多くの時間を割くことができなかったことが悔やまれる。しかし、短い時間ながらもペアで交換した意見・考えの共有を経て、論理的に思考し表現に生かせた生徒もおり、自分の解答を補足修正してポイントをしっかり発表することができた。授業者がそのポイントをしっかり板書してまとめ､共有を図ることが徹底できればなおよかったと思われる。「言語活動」は授業計画の段階でおおよその時間を想定できるものの、活動途中の個々の生徒の観察と、個々の生徒にどのように助言するかという、実際の授業の中での時間の見極めも重要であることを実感した。「言語活動」を通して身に付けさせたい力を育むために、その授業の時間内でいかに的確な助言ができるのか、様々な場合を想定して授業計画を練っていくこと、また日頃から授業の中で言語活動しやすいような雰囲気を作り上げていくことの重要性も再認識することができた。
今後の課題としては、下記の生徒の感想にもあるように、言語活動による成果物を指導者がいかに迅速に評価するか、また指導者によるまとめの時間を設定し考えの共有を図れるかが挙げられる。「言語活動」を通して身に付けさせたい力を育むには指導者の入念な準備と事後のまとめによって、さらに高みを目指すことが可能であると考える。「言語活動」を取り入れた授業展開には従来型の授業よりも多くの時間数を割いてしまうという困難さがあるが、「言語活動」を通してしか身に付けることができない力があると信じて、今後も取り入れていきたいと考える。

（６）生徒の感想
今回の半年間に及ぶ取組を振り返り、生徒（３７名）にアンケートを行った。結果は以下のとおりである。
Ｑ１．講義形式の授業に比べ、積極的に「読む」ことはできましたか？
ア　よくできた　　（１８名・・・４８．６％）
イ　まあまあできた　　（１８名・・・４８．６％）
ウ　あまりできなかった（１名・・・・・２．７％）
エ　できなかった　　（０名）

Ｑ２．講義形式の授業に比べ、教材を深く理解できましたか？
ア　よくできた　　（１２名・・・３２．４％）
イ　まあまあできた　　（２２名・・・５９．５％）
ウ　あまりできなかった（２名・・・・・５．４％）
エ　できなかった　　（１名・・・・・２．７％）

上記のことから分かることは講義形式の授業に比べ、ほとんどの生徒が積極的に読むことができたということである。従来の講義形式の授業では受身で、「読む」ときも目で追うものの、自ら積極的に読んではいなかった生徒が多いと思われる。しかし、今回の半年間の試みの中では、積極的に「読む」ことができたという生徒がかなり多くいたことは一定の成果があったといえる。その他自由筆記の感想を次ページに掲げる。

○板書をつくるのは難しかったけど、分かりやすく作るためにより深くその単元について考えることができたいい機会だった。
○要点を押さえるという点では講義形式がいいけど、読むという点では今回した方がよく読めると思った。
○自分で板書を作成するために講義形式のときよりもより深めて読むことができたと思う。
○いつもより注意して読もうとしたので、深く読むことができてよかった。
○自分で工夫して板書をつくるのはやっぱり難しいなと思った。また、グループで話し合ったり他の人の意見を聞いたりして、周りの人はどう考えているのかが分かって自分との共通点や違いを見付けられた。
○自分で考えることで深く読むようになった。相手の考えを聞いて、相手の良い点を吸収することで、さらに良い考えになっていき、とても楽しかった。
○この取り組みの方が授業に集中でき、理解しやすいなと思った。「授業に参加してる！！」と感じられた。
○他の人が大事だと思う所と自分がそう思う所では違う所があったりしたので、新しい発見があった。まとめ方も参考になった。
○自分たちで考えることで授業の内容について深く考えることができたと思う。やはり聞くだけの授業ではなかなか頭に入ってこないことがあるので､今回の形式は非常に有益だったと思う。
○自分で文書をまとめることは難しかったが、その分深く読むことができたり、筆者の主張をつかんだりすることができた。要約の仕方も学べたと思う。
○自分たちでの取り組みの方が教科書の本文をたくさん読んでいたと思う。他の人たちの取り組みを見ることも多くできて、どこが大事だとか、ここはそんなに大事ではないなとか気付くことができた。授業もとても集中できるし、他の人の意見を見るのもすごく楽しかった。
○みんなと相談しながら、いつもよりも楽しく積極的に取り組めたと思う。自分で考えることが難しいと、先生からアドバイスがもらえて分かりやすい授業になっていた。
○意見を交換するときは、自分も本文をしっかり読んでいないと話し合えないし、自分が気付けなかったところに気付くことができたので、とても良かったと思う。
○いつもの授業よりも積極的に授業に参加しようという気持ちが生まれたので個人的には楽しかった。
○いつもの授業はほとんど聞くだけで終わってしまっていたけど、この授業は自分で考えるので内容もよく頭に入ってきて理解しやすかった。

●自分で考える癖がついて良かったが、テスト前は先生の板書が欲しかった。
●いつもの授業の方が分かりやすい。その方が時間もかからなさそう。
●グループ学習で、自分の担当していない段落については要点があまり頭に入ってこなかった。
●個人で、ペアで読み深めることはできたけれど、普通にノートにまとめる方が、あとからも見やすく理解できた。
●グループで考えたものを発表した際には、自分たちの担当した箇所とそうでない箇所で内容理解に少々ばらつきがあるのではないかと思った。
●グループで学習することによって、自分の考えを深めることはできたけれど、自分の読み取った、またはグループでまとめた内容がテストの時に正解をもらえるかが不安だった。
●教材をやる中で構造把握に着目できるようになり、また講義形式とは違い、思考する時間が多かったため応用力もついたと感じる。しかし定期テストなどの時に勉強する上で、自分たちのまとめたものが正しいのかどうかの自信が持てず不安だった。
●講義形式の方が内容を理解できず、自分で考えまとめることも大切だが、間違えているところがあるんじゃないかと不安を感じた。

「言語活動」を取り入れた本実践の工夫とポイント

１　「言語活動」の組織化･構造化を図り、生徒の思考力を深める授業づくり

言語活動は、それ自体の力を高めることを目的とするのではなく、思考力・判断力・表現力等や伝え合う力をはぐくむためにどう効果的に活用するかという視点で授業に取り入れることが大切です。ねらいや目的を明確にし、段階的・計画的に言語活動に取り組むことは、生徒の学力、意欲、主体的に学習に取り組む態度等を高めることにつながります。本実践は、日常的な読解指導の中で、中心問題についてペア学習による意見交換の場を設定し、そこでの段階的な学習活動を通して「文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりする」力を高め、論理的思考力・表現力の育成を図っています。

２　拡大機を活用した発表の場の工夫

本実践は、生徒が書いたものを「拡大機」で引き伸ばして提示し、生徒に改善点を発表させる点に工夫があります。家庭学習で課した問いに対する生徒の答を予め回収して生徒に提示する素材を選び、それを文字が見えるように拡大機で引き伸ばして黒板にマグネットで貼付することで生徒が板書する時間を短縮し、授業の効率化・焦点化を図っています。同様の工夫は、実物投影機や電子黒板等でもできますが、拡大機で引き伸ばした用紙は黒板に自由にレイアウトが可能で、紙を入れ替えたり板書との関連性を高めたりすることができる点がメリットです。機器や方法は目的に応じて使い分けるとよいでしょう。

３　「伝え合う場」をどう設定したか

ペア学習の際に「①考えたプロセス、答のポイントの二点を示し合う（表明）→②相違点を確認する（照合）→③相違点の理由や妥当性を検討する（分析・評価）→④自分の答を修正する（再構成）」という指示を出し、言語活動の構造化を図って生徒の論理的思考力・表現力を高めることにつなげています。また、話し合った結果をもとに、拡大機で引き伸ばした答を参照しつつ改善点を発表させ、教師の指導・助言のもとで答の妥当性の共有を図っていくことができるように工夫されています。

４　本実践の意義と活用の留意点

本実践の成果は、酒井教諭のまとめにあるように、生徒が「ペアで交換した意見・考えの共有を経て、論理的に思考し表現に生かせた」という点にあります。授業アンケートでは、言語活動型の授業を通して読むことへの積極性や理解力が高まったとほとんどの生徒が回答していました。本実践の意義は、構造化・組織化を図った言語活動が思考力・判断力・表現力等の向上に結び付くことを示した点にあります。

本実践を活用する際の留意点としては、

①言語活動後のまとめや評価を適切に行うこと

②言語活動に取り組みやすい雰囲気作りを日頃から行うこと

が挙げられます。本実践のような言語活動は、従来型の授業を基盤としつつ現実的に取り組むことが可能で、効果も十分に期待できる事例です。

長崎県教育センター　教科・経営研修課　高校教育研修班　畑野公昭